

--	--	--

問 1

8 点

(a) 重心の加速度は、式 (2) の両辺を t で 2 階微分して

$$a_G = \frac{m_1 a_1 + m_2 a_2}{m_1 + m_2} = \frac{-F + F}{m_1 + m_2} = 0$$

すなわち加速度は 0、よって等速運動あるいは静止状態である。

(b) 相対座標を t で 2 回微分すると

$$a = a_2 - a_1 = \frac{F}{m_1} - \frac{-F}{m_2} = \frac{m_1 + m_2}{m_1 m_2} F = \frac{F}{m}$$

したがって $ma = F$ を得る。

問 2

14 点

2 つの物体の間に働く力 F は $F = -k(x_2 - x_1 - R) = -k(x - R)$ である。

相対運動の方程式は $m \frac{d^2 x}{dt^2} = -k(x - R)$ 、

したがって角振動数は $\omega = \sqrt{\frac{k}{m}} = \sqrt{\frac{(m_1 + m_2)k}{m_1 m_2}}$ である。

次に相対速度は $v = \frac{dx}{dt} = -C_1 \omega \sin \omega t + C_2 \omega \cos \omega t$ である。

初期条件より $t = 0$ において $x - R = C_1 = r$ 、 $v = C_2 \omega = 0$ 、すなわち $C_1 = r$ 、 $C_2 = 0$ である。

2 つの物体の最初の変位 r_1 と r_2 は $r_2 - r_1 = r$ 、また重心が動かないことから $m_1 r_1 + m_2 r_2 = 0$ 以上から $r_1 = -\frac{m_2}{m_1 + m_2} r$ 、 $r_2 = \frac{m_1}{m_1 + m_2} r$ を得る。

$$\omega = \sqrt{\frac{(m_1 + m_2)k}{m_1 m_2}}$$

$$C_1 = r$$

$$C_2 = 0$$

$$r_1 = -\frac{m_2}{m_1 + m_2} r$$

$$r_2 = \frac{m_1}{m_1 + m_2} r$$

解答合計

点

--	--	--

問 3

4 点

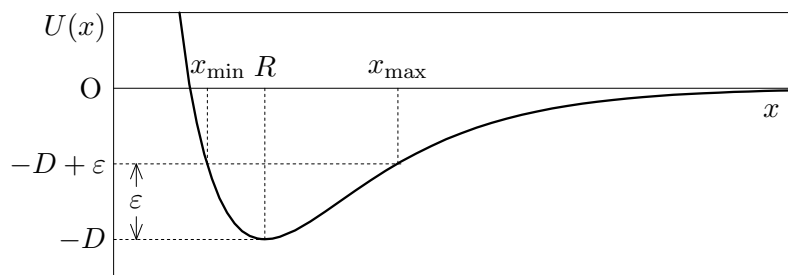
$F(x) = -\frac{dU(x)}{dx}$ と $F(x) = -k(x - R)$ より $U(x) = \frac{1}{2}k(x - R)^2 + U_0$, ただし U_0 は定数。
ポテンシャルエネルギーの極小値を 0 とするよう選ぶと $U_0 = 0$

$$U(x) = \frac{1}{2}k(x - R)^2$$

問 4

4 点

$\varepsilon < D$ の場合には, 相対距離は $x_{\min} \leq x \leq x_{\max}$ の範囲で振動する。 $\varepsilon \rightarrow D$ のとき x の最大値は ∞ となり、解離する。
求める範囲は $0 \leq \varepsilon < D$



$$\varepsilon \text{ の範囲 : } 0 \leq \varepsilon < D$$

問 5

12 点

(a) $\alpha|x - R| \ll 1$ のとき, 近似式を使うと

$$U(x) = D \left[\left\{ 1 - 2\alpha(x - R) + \frac{1}{2}(2\alpha)^2(x - R)^2 \right\} - 2 \left\{ 1 - \alpha(x - R) + \frac{1}{2}\alpha^2(x - R)^2 \right\} \right]$$

$$= -D + \alpha^2 D (x - R)^2 \equiv -D + \frac{1}{2} k (x - R)^2$$

力の定数 $k = 2\alpha^2 D$ である

(b) 相対運動の運動方程式は $m \frac{d^2 x}{dt^2} = -\frac{dU}{dx} = -k(x - R) = -2\alpha^2 D (x - R)$ である。

これは単振動の方程式であり, 角振動数は $\omega = \sqrt{\frac{k}{m}} = \sqrt{\frac{2\alpha^2 D}{m}}$

(c) 相対座標 x が $X = R \pm r$ のとき, 運動エネルギーは 0 となるので $E = -D + \varepsilon = U(R \pm r)$, すなわち $-D + \varepsilon = -D + \alpha^2 D r^2$ が成り立つ。ゆえに $r = \sqrt{\frac{\varepsilon}{\alpha^2 D}} = \frac{1}{\alpha} \sqrt{\frac{\varepsilon}{D}}$ を得る。

(a) $U(x) =$ $-D + \alpha^2 D (x - R)^2$

$k =$ $2\alpha^2 D$

(b) $\omega =$ $\sqrt{\frac{2\alpha^2 D}{m}}$

(c) $r =$ $\frac{1}{\alpha} \sqrt{\frac{\varepsilon}{D}}$

解答合計

点

--	--	--

問 6

4 点

$k = m\omega^2$ に $m = \frac{m_1 m_2}{m_1 + m_2} = 6.855 \text{ u} = 1.138 \times 10^{-26} \text{ kg}$, $\omega = 4.088 \times 10^{14} \text{ rad/s}$ を代入して

$$k = 1.902 \times 10^3 \text{ N/m}, \alpha = \sqrt{\frac{k}{2D}} = 2.311 \times 10^{10} \text{ m}^{-1}$$

$$k = \boxed{1.902 \times 10^3 \text{ N/m}}$$

$$\alpha = \boxed{2.311 \times 10^{10} \text{ m}^{-1}}$$

問 7

4 点

電磁波の波長を λ と置くと $\lambda = \frac{2\pi c}{\omega} = \frac{2\pi \times 3.00 \times 10^8 \text{ m/s}}{4.088 \times 10^{14} \text{ s}^{-1}} = 4.61 \times 10^{-6} \text{ m}$

この波長の電磁波は赤外線

波長 = $\boxed{4.61 \times 10^{-6} \text{ m}}$

, この波長の電磁波は

$\boxed{\text{赤外線}}$

に属する。

解答合計

点

--	--	--

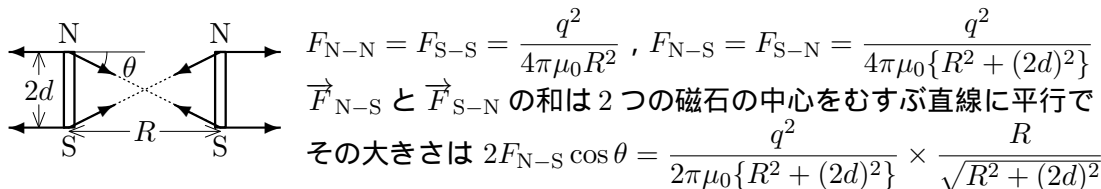
問 1

12 点

磁石に作用する力 F は 2 つの磁石の中心を結ぶ直線に平行である。

以下で $F > 0$ は斥力, $F < 0$ は引力である。

(a) $F = \frac{q^2}{2\pi\mu_0} \left(\frac{1}{R^2} - \frac{1}{R^2 + 4d^2} \times \frac{R}{\sqrt{R^2 + 4d^2}} \right) = \frac{q^2}{2\pi\mu_0} \frac{(R^2 + 4d^2)^{3/2} - R^3}{R^2(R^2 + 4d^2)^{3/2}} > 0$ 斥力



(b) (a) の場合と力の向きが逆となるので $F = -\frac{q^2}{2\pi\mu_0} \frac{(R^2 + 4d^2)^{3/2} - R^3}{R^2(R^2 + 4d^2)^{3/2}} < 0$ 引力

(c) $F = \frac{q^2}{4\pi\mu_0} \left\{ \frac{2}{R^2} - \frac{1}{(R-2d)^2} - \frac{1}{(R+2d)^2} \right\} = -\frac{2q^2}{\pi\mu_0} \frac{d^2(3R^2 - 4d^2)}{R^2(R^2 - 4d^2)^2} < 0$ 引力

(d) (c) の場合と力の向きが逆となるので $F = \frac{2q^2}{\pi\mu_0} \frac{d^2(3R^2 - 4d^2)}{R^2(R^2 - 4d^2)^2} > 0$ 斥力

(a) $\frac{q^2}{2\pi\mu_0} \frac{(R^2 + 4d^2)^{3/2} - R^3}{R^2(R^2 + 4d^2)^{3/2}}$

(b) $-\frac{q^2}{2\pi\mu_0} \frac{(R^2 + 4d^2)^{3/2} - R^3}{R^2(R^2 + 4d^2)^{3/2}}$

(c) $-\frac{2q^2}{\pi\mu_0} \frac{d^2(3R^2 - 4d^2)}{R^2(R^2 - 4d^2)^2}$

(d) $\frac{2q^2}{\pi\mu_0} \frac{d^2(3R^2 - 4d^2)}{R^2(R^2 - 4d^2)^2}$

問 2

12 点

$\Delta = \frac{d}{R}$ とおくと

(a) $F = \frac{q^2}{2\pi\mu_0 R^2} \{1 - (1 + 4\Delta^2)^{-3/2}\} \cong \frac{q^2}{2\pi\mu_0 R^2} \{1 - (1 - 6\Delta^2)\} = \frac{q^2}{2\pi\mu_0 R^2} \times 6\Delta^2$

(b) $F = -\frac{q^2}{2\pi\mu_0 R^2} \times 6\Delta^2$

(c) $F = \frac{q^2}{4\pi\mu_0 R^2} \{2 - (1 - 2\Delta)^{-2} - (1 + 2\Delta)^{-2}\} \cong \frac{q^2}{4\pi\mu_0 R^2} \{2 - (1 + 4\Delta + 12\Delta^2) - (1 - 4\Delta + 12\Delta^2)\}$
 $= -\frac{q^2}{4\pi\mu_0 R^2} \times 24\Delta^2 = -\frac{q^2}{\pi\mu_0 R^2} \times 6\Delta^2$

(d) $F = \frac{q^2}{4\pi\mu_0 R^2} \times 24\Delta^2 = \frac{q^2}{\pi\mu_0 R^2} \times 6\Delta^2$

(a) $\frac{3q^2}{\pi\mu_0 R^2} \left(\frac{d}{R}\right)^2$

(b) $-\frac{3q^2}{\pi\mu_0 R^2} \left(\frac{d}{R}\right)^2$

(c) $-\frac{6q^2}{\pi\mu_0 R^2} \left(\frac{d}{R}\right)^2$

(d) $\frac{6q^2}{\pi\mu_0 R^2} \left(\frac{d}{R}\right)^2$

解答合計

点

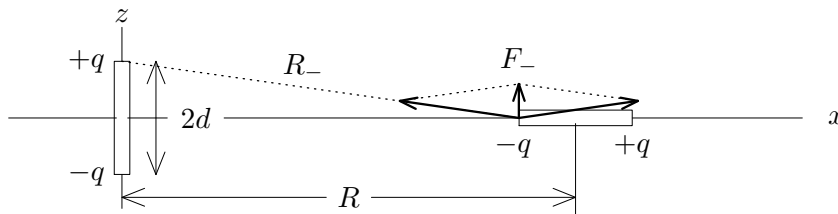
--	--	--

問 3

8 点

(a) x 軸上の磁荷 $-q$ から z 軸上の磁荷までの距離を $R_- = \sqrt{(R-d)^2 + d^2}$, x 軸上の磁荷 $+q$ から z 軸上の磁荷までの距離を $R_+ = \sqrt{(R+d)^2 + d^2}$ とする。 z 軸上の磁荷 $\pm q$ が x 軸上の磁荷 $-q$ に及ぼす力の和は z 軸正方向で、その大きさは

$$F_- = \frac{q^2}{2\pi\mu_0} \frac{1}{R_-^2} \times \frac{d}{R_-} = \frac{q^2}{2\pi\mu_0} \frac{d}{\{(R-d)^2 + d^2\}^{3/2}} = \frac{q^2}{2\pi\mu_0} \frac{d}{R^3} \left(1 - \frac{2d}{R} + \frac{2d^2}{R^2}\right)^{-3/2} \cong \frac{q^2}{2\pi\mu_0} \frac{d}{R^3} \left(1 + \frac{3d}{R}\right)$$



z 軸上の磁荷 $\pm q$ が x 軸上の磁荷 $+q$ に及ぼす力の和は z 軸負方向で、その大きさは同様にして

$$F_+ = \frac{q^2}{2\pi\mu_0} \frac{d}{R^3} \left(1 - \frac{3d}{R}\right), \text{ したがって合力は } z \text{ 軸正方向, 大きさは } f = F_- - F_+ = \frac{3q^2}{\pi\mu_0 R^2} \left(\frac{d}{R}\right)^2$$

$$F_-, F_+ \text{ は右回りの回転を起こすので, 力のモーメントは } N = -d(F_+ + F_-) = -\frac{q^2}{\pi\mu_0 R} \left(\frac{d}{R}\right)^2$$

(b) 偶力の大きさ f_c は $N = 2df_c$ より $f_c = \frac{N}{2d} = \frac{q^2}{2\pi\mu_0 R^2} \frac{d}{R}$

(a) $f = \frac{3q^2}{\pi\mu_0 R^2} \left(\frac{d}{R}\right)^2$ $N = -\frac{q^2}{\pi\mu_0 R} \left(\frac{d}{R}\right)^2$

(b) $f_c = \frac{q^2}{2\pi\mu_0 R^2} \frac{d}{R}$

問 4

3 点

磁荷 $+q, -q$ に作用する力は z 軸正方向, 負方向で、その大きさは $F = qH$ である。また力の作用線間の距離は $2d \sin \theta$ である。したがって偶力のモーメントは

$$N = qH \times 2d \sin \theta = 2qHd \sin \theta$$

$N = 2qHd \sin \theta$

問 5

4 点

$\pm q$ の磁荷には一定の力 qH が z 軸の \pm 方向に作用している。一様な重力を受ける振り子のおもりと同様に考えて、磁石が z 方向を向いているとき ($\theta = 0$ のとき) が最も位置エネルギーが低い状態である。角度 θ のとき、磁荷の z 座標は $d(1 - \cos \theta)$ だけ変化するので、位置エネルギーは $2qH \times d(1 - \cos \theta)$ だけ増加する。したがって必要な仕事は $2qHd(1 - \cos \theta)$ である。

必要な仕事 = $2qHd(1 - \cos \theta)$

解答合計

点

--	--	--

問 6

4 点

質点の微小振動の運動方程式は $Md \frac{d^2\theta}{dt^2} = -qH \sin\theta \cong -qH\theta$, $\frac{d^2\theta}{dt^2} = -\frac{qH}{Md} \theta$

角振動数 $\omega = \sqrt{\frac{qH}{Md}}$, 周期 $T = 2\pi\sqrt{\frac{Md}{qH}}$

あるいは

$-q$ の磁荷には $-z$ 方向に一定の力 qH が作用しているので、長さ d の振り子と同様に考えて

周期は $T = 2\pi\sqrt{\frac{d}{qH/M}} = 2\pi\sqrt{\frac{Md}{qH}}$

$$T = 2\pi\sqrt{\frac{Md}{qH}}$$

問 7

3 点

磁石の中心における磁場の強さを H_0 とする。

磁極 $+q$ に作用する力は $+z$ 方向、大きさは $q\left(H_0 + \frac{\Delta H}{\Delta z}d\right)$,

磁極 $-q$ に作用する力は $-z$ 方向、大きさは $q\left(H_0 - \frac{\Delta H}{\Delta z}d\right)$,

合力は $+z$ 方向、大きさは $f = q\left(H_0 + \frac{\Delta H}{\Delta z}d\right) - q\left(H_0 - \frac{\Delta H}{\Delta z}d\right) = 2qd\frac{\Delta H}{\Delta z} = m\frac{\Delta H}{\Delta z}$

$$f = m\frac{\Delta H}{\Delta z}$$

問 8

4 点

$\pm m$ の磁気双極子に作用する力は $\pm m\frac{\Delta H}{\Delta z}$, z 方向の加速度は $a = \pm\frac{m}{A}\frac{\Delta H}{\Delta z}$

長さ L を通過する時間は $\Delta t = \frac{L}{v}$ なので、この間の変位は $z_{\pm} = \frac{1}{2}a\Delta t^2 = \pm\frac{m}{2A}\frac{\Delta H}{\Delta z}\left(\frac{L}{v}\right)^2$

広がり $l = z_+ - z_- = \frac{m}{A}\left(\frac{L}{v}\right)^2\frac{\Delta H}{\Delta z}$

$$l = \frac{m}{A}\left(\frac{L}{v}\right)^2\frac{\Delta H}{\Delta z}$$

解答合計

点

--	--	--	--

問 1

5 点

内部エネルギーは状態量であるから 1 サイクル終わったとき始めの状態に戻るので

$$\Delta U = Q_H - W - Q_L = 0$$

である。したがって $W = Q_H - Q_L$ の関係がある。

この熱機関の熱効率 e_c は

$$e_c = \frac{W}{Q_H} = \frac{Q_H - Q_L}{Q_H} = 1 - \frac{Q_L}{Q_H}$$

$e_c = 1 - \frac{Q_L}{Q_H}$

問 2

10 点

高温の物体が失ったエントロピーは $\frac{Q}{T_H}$

低温の物体が得たエントロピーは $\frac{Q}{T_L}$

全体のエントロピーの変化量は $\Delta S = \frac{Q}{T_L} - \frac{Q}{T_H} = \frac{T_H - T_L}{T_L T_H} Q$

$T_H > T_L$ であるから $\Delta S > 0$, 従ってこの過程でエントロピーは増大している。

問 3

10 点

各過程での気体のエントロピーの増減は

過程 BC (断熱可逆過程) $\Delta S_{BC} = 0$ 過程 CD (等温可逆過程) $\Delta S_{CD} = -\frac{Q_L}{T_L}$

過程 DA (断熱可逆過程) $\Delta S_{DA} = 0$ 過程 AB (等温可逆過程) $\Delta S_{AB} = \frac{Q_H}{T_H}$

1 サイクルの間のエントロピーの変化の合計 ΔS は $\Delta S = \frac{Q_H}{T_H} - \frac{Q_L}{T_L}$ となる。

エントロピーは状態量だから始めの状態にもどれば始めの値に戻るので $\Delta S = 0$ である。

よって $\frac{Q_H}{T_H} - \frac{Q_L}{T_L} = 0$, すなわち $\frac{Q_H}{T_H} = \frac{Q_L}{T_L}$ または $\frac{Q_L}{Q_H} = \frac{T_L}{T_H}$

$\Delta S = \frac{Q_H}{T_H} - \frac{Q_L}{T_L}$
--

Q_H, T_H, Q_L, T_L の間の関係式 : $\frac{Q_L}{Q_H} = \frac{T_L}{T_H}$

解答合計

点

--	--	--

問 4

5 点

前問より $\frac{Q_L}{Q_H} = \frac{T_L}{T_H}$, 従ってカルノーサイクルの熱効率 e_c は

$$e_c = 1 - \frac{Q_L}{Q_H} = 1 - \frac{T_L}{T_H}$$

なおこの効率は作業物質によらない。

$e_c = 1 - \frac{T_L}{T_H}$

問 5

10 点

1 サイクルの間に不可逆性に由来するエントロピーの増加を $S_i (> 0)$ とすると

1 サイクルが終了した時点でのエントロピー変化 ΔS は $\Delta S = \frac{Q_H}{T_H} - \frac{Q_L}{T_L} + S_i$

エントロピーが状態量であることから $\Delta S = 0$, すなわち $\frac{Q_L}{Q_H} = \frac{T_L}{T_H} + \frac{T_L}{Q_H} S_i$

熱効率は $e = \frac{W}{Q_H} = 1 - \frac{Q_L}{Q_H} = 1 - \frac{T_L}{T_H} - \frac{T_L}{Q_H} S_i < 1 - \frac{T_L}{T_H} = e_c$

問 6

15 点

(a) コンバインドサイクルに入力した全熱量を Q とすると, ガスタービンで仕事に変換された量は $Q e_g$, 排熱になった量は $Q(1 - e_g)$, 排熱のうち蒸気タービンで仕事に変換される量は $Q(1 - e_g) \times e_s$ である。コンバインドサイクル全体で仕事に変換される量 $Q e_{cc}$ はこれらの和である。

したがって $Q e_{cc} = Q e_g + Q(1 - e_g) e_s$ である。これより $e_{cc} = e_g + (1 - e_g) e_s$

(b) 各々をカルノーサイクルと仮定すれば $e_g = 1 - \frac{T_{gL}}{T_{gH}}$ および $e_s = 1 - \frac{T_{sL}}{T_{sH}}$ であるから

$$e_{cc} = 1 - \frac{T_{gL}}{T_{gH}} + \frac{T_{gL}}{T_{gH}} \left(1 - \frac{T_{sL}}{T_{sH}} \right) = 1 - \frac{T_{gL} T_{sL}}{T_{gH} T_{sH}}$$

(c) ガスタービンの熱効率 $e_g = 1 - \frac{T_{gL}}{T_{gH}} = 1 - \frac{873}{1773} = 0.508$

コンバインドサイクルの熱効率 (今の場合 $T_{gL} = T_{sH}$ である) $e_{cc} = 1 - \frac{T_{sL}}{T_{gH}} = 1 - \frac{373}{1773} = 0.790$

コンバインドサイクルにより熱効率は $\frac{e_{cc}}{e_g} = 1.56$ 倍に改善される。

(a) $e_{cc} =$

$e_g + (1 - e_g) e_s$

(b) $e_{cc} =$

$1 - \frac{T_{gL} T_{sL}}{T_{gH} T_{sH}}$

(c) $\frac{e_{cc}}{e_g} =$

1.56

解答合計

--	--	--	--

問 7

5 点

内部エネルギーの変化量は問 1 の場合と同様に $\Delta U = Q_L + W - Q_H$

内部エネルギー U は状態量であるから始めの状態に戻ると $\Delta U = 0$ である。

$$Q_H = Q_L + W$$

$$\Delta U = Q_L + W - Q_H$$

$$Q_H, Q_L, W \text{ の間の関係式 : } Q_H = Q_L + W$$

問 8

10 点

1 サイクルの間のエントロピーの変化 ΔS は $\Delta S = \frac{Q_L}{T_L} - \frac{Q_H}{T_H}$ となる。

エントロピーは状態量だから 1 サイクルを経て始めの状態にもどると $\Delta S = 0$ である。

よって $\frac{Q_L}{T_L} - \frac{Q_H}{T_H} = 0$, すなわち $\frac{Q_H}{Q_L} = \frac{T_H}{T_L}$

$$\Delta S = \frac{Q_L}{T_L} - \frac{Q_H}{T_H}$$

$$Q_H, T_H, Q_L, T_L \text{ の間の関係式 : } \frac{Q_H}{Q_L} = \frac{T_H}{T_L}$$

問 9

5 点

ヒートポンプの効率 $\varepsilon_{rc} = \frac{Q_L}{W} = \frac{Q_L}{Q_H - Q_L}$ と表される。

前問の結果を用いて

$$\varepsilon_{rc} = \frac{Q_L}{Q_H - Q_L} = \frac{1}{\frac{Q_H}{Q_L} - 1} = \frac{1}{\frac{T_H}{T_L} - 1} = \frac{T_L}{T_H - T_L}$$

$$\varepsilon_{rc} = \frac{T_L}{T_H - T_L}$$

解答合計

点

--	--	--

問 10

10 点

問 5 と同じく不可逆過程に由来するエントロピー $S_i (> 0)$ を考慮すれば, 1 サイクルの間のエントロピーの増減は

$$\Delta S = \frac{Q_L}{T_L} - \frac{Q_H}{T_H} + S_i$$

S が状態量であることから $\Delta S = 0$, したがって $\frac{Q_H}{Q_L} = \frac{T_H}{T_L} + \frac{T_H}{Q_L} S_i$

効率は $\varepsilon = \frac{Q_L}{Q_H - Q_L} = \frac{1}{\frac{Q_H}{Q_L} - 1} = \frac{1}{\frac{T_H}{T_L} + \frac{T_H}{Q_L} S_i - 1} < \frac{1}{\frac{T_H}{T_L} - 1} = \frac{T_L}{T_H - T_L} = \varepsilon_{rc}$ である。

問 11

10 点

屋外 30°C , 室内 25°C のとき $T_H - T_L = 5\text{ K}$, $T_L = 298\text{ K}$, 効率 $\varepsilon_{rc} = \frac{298}{5} = 59.6$

屋外 30°C , 室内 27°C のとき $T_H - T_L = 3\text{ K}$, $T_L = 300\text{ K}$, 効率 $\varepsilon_{rc} = \frac{300}{3} = 100$

室内から毎秒 1000 J の熱を取り出すために必要な電力は

室内 25°C のとき $\frac{1000}{\varepsilon_{rc}} = \frac{1000}{59.6} \cong 16.8\text{ (W)}$, 室内 27°C のとき $\frac{1000}{\varepsilon_{rc}} = \frac{1000}{100} = 10\text{ (W)}$

$\varepsilon_{rc}(\text{室温 } 25^\circ\text{C}) =$

$\varepsilon_{rc}(\text{室温 } 27^\circ\text{C}) =$

電力 (室温 25°C) =

電力 (室温 27°C) =

問 12

5 点

両熱源の温度差 27 K であるから理想的な冷蔵庫の冷却の効率は $\varepsilon_{rc} = \frac{273}{27} \cong 10.1$

毎秒 1000 J の熱を取り出すに必要な電力は $\frac{1000}{\varepsilon_{rc}} = 1000 \times \frac{27}{273} \cong 98.9\text{ (W)}$

一般の冷蔵庫では少なくとも 99 W の電力を要する。

$\varepsilon_{rc} =$

電力 =

解答合計

点

--	--	--

問 1

10 点

速度 v で遠ざかる銀河から来た光の波長 $\lambda' = \lambda \left(1 + \frac{v}{c}\right)$

$\Delta\lambda = \lambda' - \lambda$ と置くと $\frac{\Delta\lambda}{\lambda} = \frac{v}{c}$, 観測結果から $\frac{\Delta\lambda}{\lambda} = \frac{2}{100} = \frac{1}{50}$ $\frac{v}{c} = \frac{1}{50}$

銀河までの距離は $D = \frac{v}{H_0} = \frac{c}{H_0} \frac{v}{c} = 140 \text{ 億光年} \times \frac{1}{50} = 2.8 \text{ 億光年}$

銀河までの距離 =

2.8 億光年

問 2

10 点

C から見た A の速度 $\frac{d\vec{D}_{CA}}{dt} = \frac{d\vec{D}_{EA}}{dt} - \frac{d\vec{D}_{EC}}{dt}$

ここで $\frac{d\vec{D}_{EA}}{dt} = H_0 \vec{D}_{EA}$, $\frac{d\vec{D}_{EC}}{dt} = H_0 \vec{D}_{EC}$

$\frac{d\vec{D}_{CA}}{dt} = H_0 (\vec{D}_{EA} - \vec{D}_{EC}) = H_0 \vec{D}_{CA}$

すなわち, C から見てもハッブルの法則は同じである。

問 3

10 点

$E = \frac{1}{2} v^2 - \frac{GM}{D}$ とおき, これを時間で微分すると $\frac{dE}{dt} = v \frac{dv}{dt} + \frac{GM}{D^2} \frac{dD}{dt} = v \left(\frac{dv}{dt} + \frac{GM}{D^2} \right)$

一方, 式 (9) から $\frac{dv}{dt} + \frac{GM}{D^2} = 0$, これを上式に代入すると $\frac{dE}{dt} = 0$

ゆえに $E = \frac{1}{2} v^2 - \frac{GM}{D} = (\text{一定})$ を得る。

【別解】

運動方程式 (9) の両辺を m で割って $\frac{dv}{dt} = -\frac{GM}{D^2}$

この式と $v = \frac{dD}{dt}$ と, 辺々掛けあわせて $v \frac{dv}{dt} = -GM \frac{1}{D^2} \frac{dD}{dt}$, $\frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} v^2 - \frac{GM}{D} \right) = 0$

したがって $\frac{1}{2} v^2 - \frac{GM}{D} = (\text{一定})$ を得る。

解答合計

点

--	--	--

問 4

10 点

式 (10) に (11) を代入して $\frac{1}{2}v^2 - \frac{4\pi}{3c^2}G\rho_m D^2 = C$ (C は定数)

ここで $\rho = \rho_m$ と式 (8) の $D(t) = a(t)r$ を用いると $\frac{1}{2}\left(\frac{da}{dt}\right)^2 r^2 - \frac{4\pi}{3c^2}G\rho a^2 r^2 = C$

$$\left(\frac{da}{dt}\right)^2 - \frac{8\pi G}{3c^2} a^2 \rho = \frac{2C}{r^2}$$

この式の右辺は時間 t に依らず一定で、左辺は共動距離 r に依存しない。したがって、両辺は t にも r にもよらない定数でありそれを K と置けば式 (7) $\left(\frac{da}{dt}\right)^2 = \frac{8\pi G}{3c^2} a^2 \rho + K$ を得る。

問 5

10 点

1 年 = 3.156×10^7 s なので $H_0 = \frac{1}{140 \times 10^8 \text{ 年} \times 3.156 \times 10^7 \text{ s/年}} = 2.263 \times 10^{-18} \text{ s}^{-1}$

式 (15) より $\rho_0 = \frac{3c^2 H_0^2}{8\pi G} = 9.165 \times 10^{-27} \text{ c}^2 \text{ kg/m}^3 = 8.248 \times 10^{-10} \text{ J/m}^3$

水素 1 原子の静止エネルギーは $E_H = \frac{10^{-3} \text{ c}^2 \text{ kg/mol}}{N_A} = 1.495 \times 10^{-10} \text{ J}$

よって $\frac{\rho_0}{E_H} = 9.165 \times 10^{-27} \text{ c}^2 \text{ kg/m}^3 \times \frac{6.022 \times 10^{23} \text{ mol}^{-1}}{10^{-3} \text{ c}^2 \text{ kg/mol}} = 5.52 \text{ m}^{-3}$

あるいは $\frac{\rho_0}{E_H} = \frac{8.248 \times 10^{-10} \text{ J/m}^3}{1.495 \times 10^{-10} \text{ J}} = 5.52 \text{ m}^{-3}$

$\rho_0 = 8.25 \times 10^{-10} \text{ J/m}^3$

1 m ³ あたりの 水素原子数に換算した数 = 5.5 個/m ³

問 6

10 点

式 (16) $\frac{dr}{dt} = \frac{c}{a(t)}$ より $\Delta r_1 = \frac{c\Delta t_1}{a(t_1)}$, $\Delta r_0 = \frac{c\Delta t_0}{a(t_0)}$

ここで $\Delta r_1 = \Delta r_0$ と置けば $\frac{\Delta t_1}{a(t_1)} = \frac{\Delta t_0}{a(t_0)}$ を得る。

解答合計

点

--	--	--

問 7

10 点

超新星を固有距離 D の球面で囲むと、この球面を光子が通過する頻度は、時間の遅れのため、超新星の放出する頻度に比べ $\frac{1}{1+z}$ だけ減少する。

したがって、単位面積当たりの頻度は、 $\frac{1}{4\pi D^2 (1+z)}$ になる。

また、光子 1 個当たりのエネルギーが $\frac{1}{1+z}$ に比例して減るので、単位時間・単位面積を通過する光子のエネルギーは $D^2 (1+z)^2$ に反比例する。

問 8

10 点

$z \ll 1$ のとき式 (25) $D = \frac{cz}{H_0}$ を式 (24) に代入し

$$m_D = 5 \log_{10} \frac{c/H_0}{D_{32.6}} + 5 \log_{10} \{(1+z)z\}$$

ここで $5 \log_{10} \frac{c/H_0}{D_{32.6}} = 5 \log_{10} \frac{140 \text{ 億光年}}{32.6 \text{ 光年}} = 5 \log_{10}(4.29 \times 10^8) = 43.16$

$z = 0.01$ を代入して $5 \log_{10} \{(1+z)z\} = -9.98$

以上から $m_D = 43.16 - 9.98 = 33.18$ を得る。

対応する点 ($z = 0.01, m_D = 33.2$) は図○印。

$m_D = 33.2$

問 9

10 点

$x = 0$ のとき式 (28) は $D = \frac{c}{H_0} \int_0^z dz = \frac{cz}{H_0}$, これを式 (24) に代入して

$$m_D = 5 \log_{10} \frac{c/H_0}{D_{32.6}} + 5 \log_{10} \{(1+z)z\} = 43.16 + 5 \log_{10} \{(1+z)z\}$$

(右辺第 1 項は問 9 と共通)。

右辺第 2 項に $z = 1.0, 1.4$ を代入し、それぞれ $5 \log_{10} \{(1+z)z\} = 1.51, 2.63$,

したがって $m_D = 44.7, 45.8$ を得る。対応する 2 点は図●印

$z = 1.0$ のとき $m_D = 44.7$

$z = 1.4$ のとき $m_D = 45.8$

解答合計

点

--	--	--

問 10

10 点

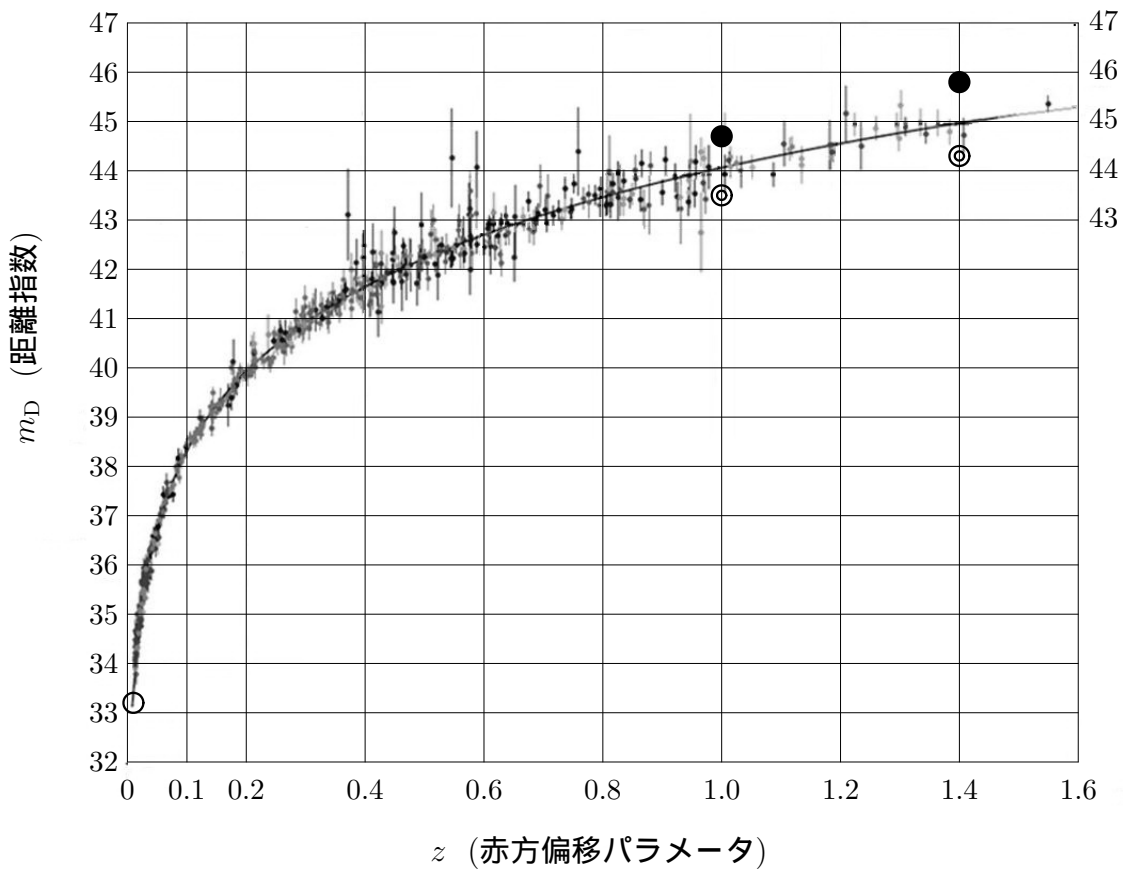
$x = 1$ のとき式 (28) は $D = \frac{c}{H_0} \int_0^z \frac{dz}{(1+z)^{3/2}} = \frac{c}{H_0} \times 2 \left(1 - \frac{1}{\sqrt{1+z}} \right)$, これを式 (24) に代入して

$$m_D = 5 \log_{10} \frac{c/H_0}{D_{32.6}} + 5 \log_{10} \left\{ 2(1+z) \left(1 - \frac{1}{\sqrt{1+z}} \right) \right\} = 43.16 + 5 \log_{10} \left\{ 2(1+z) \left(1 - \frac{1}{\sqrt{1+z}} \right) \right\}$$

右辺第 2 項に $z = 1.0, 1.4$ を代入し, それぞれ $5 \log_{10} \left\{ 2(1+z) \left(1 - \frac{1}{\sqrt{1+z}} \right) \right\} = 0.34, 1.15$, したがって $m_D = 43.5, 44.3$ を得る。対応する 2 点は下図◎印

$z = 1.0$ のとき $m_D =$

$z = 1.4$ のとき $m_D =$



観測図

解答合計

点